

JAPAN FEDERAL MEDICAL COOPERATIVE ASSOCIATION

JMCA NEWS

全医協連ニュース



発行—全国医師協同組合連合会

平成 22 年 4 月 1 日発行

No.116

春潮号

第38回通常総会開催地案内①
金沢でいんぎらひょうじまじ



◆ブロック便り

第26回関越協議会
「近医協連事務局職員研修会」開催

JMCA NEWS

全医協連ニュース
 平成 22 年 4 月 1 日 発行

No.116 春潮号

CONTENTS

<特集> 第38回通常総会開催地案内① 2

金沢でいんぎらっとしまっし

- 6 寄稿 ————— 「ケープタウン(FIGOに参加して)」……………西村篤乃
- 10 NUMBERS②③ ———— 南蛮図……………菅原克郎
- 12 旅のブラックエッセイ — 「夜光杯のお土産…
 恩師白川静先生の喜びと悲しみ」……………松平昭男
- 14 全国温泉巡り ———— 「山紫苑(国民保養温泉地/鹿野温泉国民宿舎)」
- 16 寄稿 ————— 「東北・北海道の人たち—蝦夷—」……………有海躬行
- 20 旬の食べ物紹介 ———— 「味噌煮込うどん、天むすび定食、金鱈巻」(名古屋)
- 21 医師協の雑誌から ———— 「京都保事協ニュース、北九州医協ニュースすこやか」……………河辺忠郎
- 42 水彩の旅 ————— 「旅の風景・スケッチ日和」〈第2回〉……………大森俊次
- 44 書籍紹介 ————— 「蒼穹の昴(浅田次郎)」
 「日本と世界はこうなる
 〈2010年〜〉(日下公人)」
- 46 ブロック便り ———— 近医協連 事務局職員研修会
 第26回関越協議会
- 49 ————— JMCギャラリー(三好壮一、坂西義人)
- 52 ————— 理事会だより……………岩田章男

22	【購買部】 ・購買部取扱い商品のご案内 ・2010春季JMCキャンペーン開催のご案内!!
28	【福祉部】 ・平成22年保険懇話会 ・平成22年「生命保険販売促進キャンペーン」進発式 ・全医協連取扱い保険商品一覧
36	【調査企画部】 ・平成21年事務局代表者会議
50	理事会・部会だより／マンガ

53 ————— 俳壇／編集後記



表紙・目次写真
 美しく咲き匂うさくらを好むのは人間だけではありません。小鳥たちもさくらが咲くのを今か今かと待っていたかのようにやってきて、好物のさくらの蜜を吸い、花びらをついばむのです。
 表紙写真は目白、上の写真は四十雀です。
 写真提供(表紙、目次)：栗原真純(京都保事協)



金沢城

第38回通常総会開催地案内 ①

金沢でいんぎらっとしまっし

石川県医師協同組合理事長

小森 貴

第38回全国医師協同組合連合会総会を金沢で開催するに当たり、開催地紹介をさせていただきます。

金沢といえば誰しも加賀百万石の城下町ということをお思い浮かべるでしょう。古い歴史の文化が今も美しく息づいている街です。一番有名な観光地といえば兼六園ですが、そのほかにもいろいろ見どころはたくさんあります。金沢はとても雨の多い町で冬にはもちろん雪も降りますが、その雨や雪さえも風情として取り込む懐の深い街です。晴れていれば晴れなりに、曇っていれば曇りなりに、雨ならば雨なりに、また雪が降れば雪なりに、それぞれ異なった趣を見せてくれるでしょう。

総会が開催される11月初旬は、皆様にとんな金沢の顔を見せてくれるでしょうか。兼六園で、紅葉が色づき始まるには少し早いかもしれませんが、ちょうど雪吊りの作業が始まっているでしょう。兼六園の雪吊りは例年11月1日から、園内随一を誇る「唐崎の松」から始められ一ヶ月以上かけて作業されます。これは北陸特有の湿った重い雪から枝を守るため、金沢では一般家庭の庭でも自分で雪吊りをしている人もいます。

全国ニュースでも度々取り上げられることがあるので、ご存知の方も多いことでしょう。

兼六園の名は、宏大、幽邃(ゆうすい)、

人力、蒼古、水泉、眺望の六つを兼ね備える名園という意味で、白河藩主松平定信により名付けられました。霞ヶ池周辺の明るく開放的な雰囲気と黄門橋あたりの山峡に迷いこんだような風情、人の手が尽くされていながらも自然の豊かさを感じさせる造形、そして兼六園最大の特徴とも言われる水の流れと日本海や医王山の山並みまで望むことができる眺望な



兼六園

ど、その名にふさわしい多彩な表情が兼六園の魅力です。
兼六園と隣接する成巽閣は、十三代藩主斉泰が、父の十二代藩主斉広の正室・真龍院のためにつくった隠居所です。一階は武家書院造、二階は数奇屋風書院造と、一つの棟に二つの様式が巧みに組み込まれた建物で、柱が一本もない縁側や、障子腰板に描かれた絵、ギヤマンをはめ



成巽閣



金沢城公園

込んだ雪見障子、鮮やかな色壁などに大名家の女性の邸宅の優美さが感じられます。季節ごとに前田家伝来の衣裳や道具なども公開しており、見ごたえがあります。兼六園を訪れたことはあるが成巽閣に入ったことがないという人も多いのではないのでしょうか。ぜひ時間があれば訪れてみたい場所のひとつです。

また、兼六園を挟み成巽閣と反対側にある金沢城址は、かつてはお城の中の大学としても有名だった金沢大学が郊外に移転し、現在は金沢城公園として整備されています。金沢城の瓦は五代藩主綱紀の時代に改修されたとき、鉛瓦にふきかえられました。他の城でも鉛瓦は一部用いられていますが、金沢城のように櫓や門、塀の全てに用いられた例はありません。
鉛瓦が用いられたのは、銀色に輝く屋根が美しいから、いざというときに鉛を溶かして鉄砲玉にするため、冬の寒さに耐えるため当時の焼き物の瓦では耐久性が悪かったためなどの諸説がありますが、今となってはその美しさが一番の魅力となっています。
藩政時代の建物は、石川門、三十間長



ひがし茶屋街



にし茶屋街



主計町茶屋街

屋、鶴丸倉庫などわずかですが、2001年に伝統的な木造軸組工法を用いて菱櫓・五十間長屋・橋爪門続櫓が再建されたのははじめ、今春には河北櫓の復元も終わる予定で、その後も順次復元整備が計画されています。

先生方が金沢へいらつしやる際に、もう一つ楽しみにしているのはお茶屋さんではないでしょうか。金沢にはひがし、にし、主計町の三つの茶屋街（ちややがい）が残っています。

ひがし茶屋街は、石畳の道の両側に紅殻格子のお茶屋が軒を連ね、藩政時代の情緒が色濃く残っています。この地区は国の重要伝統的建造物群保存地区に選定されており、藩政期の面影をそのまま残した景観が楽しめます。また、内部を一般公開している所もあり、典型的な江戸時代のお茶屋の造りを見ることが出来ます。

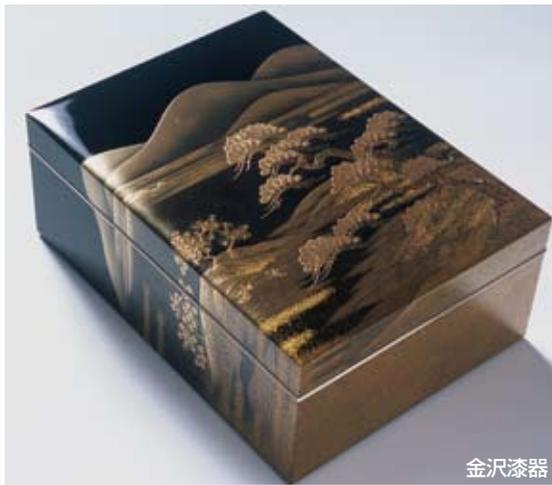
にし茶屋街は、100mほどの間に今でも多くの料亭や芸妓の置屋があり、紅殻格子で二階建ての風情ある町並みが残っています。通りの中ほどにはお茶屋を再現した金沢市西茶屋資料館があります。また主計町茶屋街は、浅野川沿いに続く茶屋街で、ひがし茶屋街、にし茶屋街と並ぶ、金沢三茶屋街のひとつです。夕暮れから街の光が浅野川の水面に映し出される様子は、ひがし、にしの茶屋街とはまた趣を異にし、さらなる風情を醸し



箱貼り体験



金箔工芸



金沢漆器



加賀友禅



九谷焼

出しています。

石川県にはまた、数多くの伝統工芸と伝統芸能が息づいています。

伝統工芸では、輪島塗、山中漆器、金沢漆器、九谷焼、加賀友禅、加賀繡(かが

ぬい)、金沢仏壇、七尾仏壇、金箔箔、牛首袖(うしくびつむぎ)といった十品目にする国指定伝統的工芸品があります。輪島塗や九谷焼は特に有名ですし、金箔は全国生産の98%以上、銀箔は100%を金箔箔で占めています。先にご紹介し

たひがし茶屋街近くには金箔・銀箔製品を販売したり金箔貼りを体験できるお店もありますからそういうところを覗いてみるのも面白いでしょう。

金沢を形容することばに、「街を歩くと謡が降ってくる」というのがあります。古くから武家や商家ばかりでなく、植木職人までが能楽をたしなみ、街を歩いていると頭の上から謡曲を口ずさむ声が聞こえてきたということです。「加賀宝生」は金沢市の無形文化財に指定されています。謡曲は今でも盛んで、医師協同組合の組合員にも謡曲を嗜まれる方が多数おられ、毎年の県医師会創立記念祭のパーティでは医師のみによる謡曲、仕舞を披露されています。

金沢素囃子は舞台の雛壇に並んで演奏する出囃子で、金沢市無形文化財の指定を受けてさらなる伝承が図られています。使用される楽器は小鼓(こつづみ)、大鼓(おおかわ)、太鼓、笛などの楽器で、三味線(三弦)以外の弦楽器は含まれません。通常、雛壇の上段には三味線、下段に囃方が並び、華やかな演奏を披露します。その格調高さや優美華麗さ、技能水準は全国トップクラスといわれ、金沢が誇る伝統芸能の一つとなっています。

総会の懇親会では、この、ひがし、にし、主計町の芸妓による素囃子をお聞きいただくかと思っております。(写真提供 金沢市)

Cape Town ケープタウン

全医協連監事

西村 篤乃

FIGO (Federation of International Gynecology and Obstetrics) が
3年に1回開催されるが、
今回は南アフリカのケープタウンで開かれた学会に出席した。
ケープタウンに入る前に、ビクトリア・フォールズを訪れたが、
この旅内容は次回に掲載する。

FIGO (Federation of International Gynecology and Obstetrics) : 国際産科婦人科連合



写真① バラック立の小屋

ケープタウンには10月初旬入国した。旅行案内書によると22℃の温度となっていたが、寒波で11℃と非常に寒く、翌日セーターでもと買物に行ったが、すでに春物、夏物に入れ替わっており、入手できなかった。

ケープタウン空港からダウンタウンに入る沿道には、バラック立の小屋が数キロメートルにも及び、マンデラが1994年大統領に就任した時、2014年までには、住民皆がちゃんとした住居に住うことができると誓言したが、実情では大幅に遅れているようである。写真①。

アパルトヘイト

人種隔離政策について、マレーシア系のガイドが熱弁をふるって興奮し、白人ドライバーが制止するという一幕があった。人種差別は、身分証明書にまで、W(ホワイト)、K(カラード)などと記載され、一見白人に見える人でも少しでも混じったらカラードとした厳しい時期もあった。また無断で自分の居住区を離れたりした場合は身柄を拘束された。

District Sixの博物館のEuro-plan Only、下段にはアフリカーンズで同意文の書かれた椅子があった。写真②。



写真③ CTICC



写真② 椅子(人種差別)



写真⑤ ジャズバンド



写真④ リビングルーム(奥はキッチンルーム)

日本人はホワイト、コリアン、チャイニーズはカラードだそうです。何故日本人はホワイトなのか？ ガイドの説明によると、法律がそう決めたから白人なのだ。

学会会場は、ダウンタウンにあるCTICC (Cape Town International Convention Centre) への会場は日本というなら幕張メッセの様なものである(写真③)。ウエスティンホテルが隣接しており、多くの学会参加者はここに宿泊した。私は写真を撮ろうと思い、海岸寄りのラディソン・サールホテルを申し込んだ。少しゆったりしたいとビジネスクラスを注文していたが、何とラッキーなことにスイートルームを頂いた。寝室はツインが2部屋、大きなリビングルーム(写真④)、バスルーム(シャワー室別に付設)2つ、台所までついていた。

部屋に入った瞬間、海に面した窓は広く、眼下に大西洋の波が白波を立て防波堤を洗っていた。実に素晴らしい！しかし夜になると、この波の音が気になって、睡眠誘導どころか邪魔をする始末、そして広すぎる部屋も不便だということ。荷物を居間に置いたらそれを取りに行く動線が長くなる不向き。この部屋は、やはりお伴を数人連れて宿泊するVIP用なの



写真⑦ FIGO2009 のチョコレート板



写真⑥ ラナンキュラス(国花)



写真⑨ マンデラが投獄されていた監獄



写真⑧ ドイカー島のアザラン

だ。台所もパーティー用に必要なので、せいぜいコーヒーカーインスタントラーメンを作るしか用のない私達夫婦には、無用の長物だった。しかしワインセラーと調理器具はありがたかった。

学会開催前には、ウエルカムパーティーが開かれ、ジャズバンドが1階ホワイエを往復、その両側には種々の屋台が並び、マレーシア系の参加者が多いのか香辛料も多種あった(写真⑤)。

学会で注目したいのは、やはりAIDS関連項目だったが、アフリカならではのシンポジウムがあった。『Genital Mutilation』である。この慣習を嫌って少女達が外国に逃亡し、一時マスコミにも報道されたが、ここでは詳細を省く。関心のある人は、GMを検索して下さい。産科の立場で言えば、悪習と思いますが、宗教的要素(イスラム教)が加わると、なかなか難しく思います。アフリカ中部ソマリアを初めとし90%がこの慣習を受けている。割礼しない女性は不祥とされ、結婚相手として相応しくないと考えられている。

学会最後のパンケットには、当地の有名楽団や歌手が花を添えた。印象に残ったのは、各テーブル中央に国花であるラナンキュラスが飾ってあり(写真⑥)、デザートにFIGO2009のチョコレート板



写真⑪ 断崖に碎ける波



写真⑩ 喜望峰最端



写真⑬ ワールドカップ競技会場



写真⑫ Good Hope 記念写真

が添えられていた△写真⑦▽。

喜望峰に向う途中、ハウト湾より船でドイカー島のアザラシを見に行った△写真⑧▽。さすが大西洋の荒波で手すりにつかまって写真撮影、今日はこれでも穏やかな波とのこと。アザラシの大群が島をおおっていた。世界中に35種類ものアザラシがいるらしく、好奇心が強く湾まできているアザラシもいた。

喜望峰に着く少し手前、マンデラが収監されていた監獄の前を通った。その門の看板には「Welcome」と書かれていた△写真⑨▽。

喜望峰の展望台に昇り、ハアハア息しながら眼下に広がる最端を写真に納めた△写真⑩▽。次に下って、断崖に打ち碎ける雄々しい波をバッチリ撮った△写真⑪▽。最後にGood Hopeの看板を入れて記念撮影△写真⑫▽。

私達のホテルの近くに、2010年開催されるワールドカップのサッカー場が今まさに建設中であつた△写真⑬▽。表側は出来上がっているが、裏にまわるとまだである。12月末には完成予定と言っている。但しケープタウンでは決勝戦は行わないそうです。このJMC NEWS発刊時までには完成を祈る。

京都保事協 松井 昭男
まつい あきお
 挿絵／保事協事務局長 大森俊次

夜光杯のお土産： 恩師白川静先生の喜びと悲しみ



某年某月あるツアーに加わって中国西域地方の観光に出掛けた。そのツアーの目玉商品は敦煌莫高窟の詳細(?)な見学である。というのはその前に行った事はあるものの時間と料金の関係上、三窟位をチラリと見たという程度。観察とは程遠いものだったから莫高窟の見学に期待をかけて参加したのである。丸一日たっぷり敦煌文物研究所の講師のお話も混じえて見学させて戴いた。十二分に目の保養をさせてもらったが、惜しむらくは写真撮影禁止という事で、呆け頭では仏像を完全に覚えたという事にはならなかった。

第二日目は敦煌博物館の見学を含めた市内見物である。敦煌付近の珍しい発掘物等をゆつくり見学した後バザールのある商店街に案内された。わつとばかりに押し寄せる日本人旅行者、仏頂面の漢族女店員、中国での団体旅行のパターンであった。同じパーティの一員である私も負けじと割り込んで必死のお土産探し。

すると、一隅の人の寄っていない場所にガラス製品らしき物があった。手にとってみると「葡萄美酒夜光杯」、「中国敦煌工艺美术廠出品」と銘打った中国風の箱に入った玉杯一対の箱であった。この時思い出したのが遥か七十年ほど昔、今や大漢学者になられた白川静先生に絞り上げられて頭に叩き込まれた漢詩の一節である。曰く、「葡萄の美酒夜光の杯：古来征戦幾人か帰る」。怖い顔した若い女店員を呼んで「この玉はホータン産か?」と中国語らしく聞いてみたが全然通じない。さすがに買ってくれそうな客にはニココリしたが、解らない。上役のオッサンが来て同じ質問をしたが「トイトイ、シアア」(対、対、是呵)の返事しかない。仕方なく一対一箱を若干個購入してお土産





とした。

半年後、白川先生を囲んで七十年前の同級生のクラス会が京都市内某ホテルの一室で開催された。その時早速この杯を差し上げた。白川先生大喜びで先ず葡萄酒ではないが伏見の銘酒をこの夜光杯に満たして少し口に含まれ、その後列席全員でこの杯を使って銘酒の飲み回しをした。そして先生が前出の「唐詩選の漢詩」王翰の「涼州詞」に出てくる「葡萄の美酒夜光の杯、飲まんと欲して琵琶馬上に催す、酔うて沙場に臥すとも君笑うこと莫れ、古来征戦幾人か回る。」の漢詩を吟じ

られて会が大いに盛り上がった。そしてこの杯は先生のお手元に納めて戴いたが、先生が逝去されて後はその時の喜んで戴いた事が懐かしい思い出として残っているのである。

漢学者としての白川先生に喜んで戴いたのは小生や同級生の喜びであったが、「征戦幾人か回る」の一句が出席者の心を抉った。白川先生の教え子であり、我々の同窓生の多くが太平洋戦争に出征し帰らなかつた。夜光杯で喜んでばかりいられる気分ではなかつた。改めて今は帰らざる同窓生を偲んで、夜光杯と王翰の詩

に酔った一夜のクラス会を過ごしたのであった。

※昨年九月東海道新幹線に乗車したところ、車内で「ひととき」という雑誌があり、半藤一利先生が矢張り中国甘肅省酒泉で購入された夜光杯を松本清張先生に差し上げられた所大喜びされたというエピソードが掲載されていたのを読んだ。王翰の詩の全文を引用させて戴いた。

※白川静先生：立命館大学名誉教授、文化勲章受賞、漢学者、白川文字学創始者



遮光器土偶

中空土偶

合掌土偶

立像土偶

東北・北海道の人たち

— 蝦夷 —

山形県医師会協同組合理事長・全医協連広報部部員
有海 躬行

はじめに

東京国立博物館で国宝土偶展を観た。縄文時代草創期にまで遡る土偶は祈りの造形とも称され、当時の人々の精神世界や信仰のあり方が表現されているといわれる。土偶のなかには東北・北海道から出土したものが多く、豊かな精神文化をもつ縄文人が住んでいたと想像できる。

まつろわぬ人ども

古代東北・北海道の住民は蝦夷(エミシ)と呼ばれていた。エミシのより古い表記は「毛人」で毛深い人の意味もあった。中国の世界観では「毛人」は世界の東の果てに棲む異民族であるから、大和朝廷もこれに倣ってエミシと呼んだ。「エミ」には「蝦」が当てられ、平安時代まで続くことになる。

蝦夷は王権に服属せず、狩猟・採取を生業としていたから「まつろわぬ人ども」と呼ばれ、古事記のヤマトタケルの東征説話には「荒ぶる蝦夷等」と記されている。日本書紀には景行天皇が日本武尊に与えたとされる詔に「東夷の中では蝦夷が最も強い。男女は交わり居り、父と子の別もない。冬は穴に宿り、夏は櫨に住む。毛衣を着、血を飲み、昆(兄)弟は疑いあう。山に登るには飛ぶ禽(鳥)の如く、草を行くことは走る獣の如くである。」とある。

りつぞう
立像土偶 (重要文化財)

山形県舟形町西ノ前遺跡出土
高さ45.0cm
縄文時代中期
山形県教育委員会蔵



がらじょう
合掌土偶 (国宝)

青森県八戸市風張1遺跡出土
高さ19.8cm
縄文時代後期
青森・八戸市蔵



これは中国の伝統的夷狄の表現であるから、大和朝廷は朝貢する異民族として模倣したのである。このころ中国では隋・唐帝国が成立し、新しい国際秩序の形成が進行していた。

日本が新羅・百済の朝貢を受ける資格を中国に承認してもらうためにも、蝦夷の存在はむしろ必要であった。遣唐使(六五九年)はわざわざエミシを帯同し、生口として高宗に対面させている。

ヒマンのヤマト

大和朝廷の地方支配の制度に国造制くにのみかどがあり、地方の有力豪族を任命して土地と人民を支配させるかわりに貢納・兵役・力役の義務を負わせた。朝廷は城柵を築きながら尺取虫のように北進したものと想像される。

当時の東北・北海道は原生林に被われて暗く獣が棲み、異形の蝦夷が潜む静寂の世界が広がっていた。それは丁度ローマの背後を遮る「黒い森」シニフカスバートの測り知れない奥行きとゲルマン人への恐怖と同質のものと思われる。

古代の城柵をみると、日本海側では淳足柵たけ(六四七年。現新潟市の駅付近に沼垂の地名が残っている)、磐舟柵(六四八年。現村上市岩船)が造成され、日本書紀には「蝦夷に備う」とあるそうだから、この一帯は蝦夷の居住地と推定される。服属した蝦夷には食料が支給されこれを狄



ちゅうくう
中空土偶(国宝)

はこだてしちよほないの
北海道函館市著保内野遺跡出土
高さ41.5cm
縄文時代後期
北海道・函館市教育委員会蔵



しやこうき
遮光器土偶(重要文化財)

あまがおか
青森県つがる市亀ヶ岡遺跡出土
高さ34.2cm
縄文時代晩期
東京国立博物館蔵

食と称した。

内陸部は陸奥国優嶺曇郡(山形県置賜郡米沢市周辺)が居住地南限とされる。

太平洋側では陸奥国の国府多賀城より北の北上川下流には玉造柵はじめ五つの城柵が置かれた。これらの地域には東北部や関東地方からの移民(柵戸)のほかに服属した蝦夷が居住していた。彼らは「俘囚」、「夷俘」と呼ばれ、稲作を生業とするものは「田夷」となった。このように、新潟・米沢・仙台平野を結んだ線の北方が蝦夷のふるさとであった。七世紀後半の安倍比羅夫の北方遠征は秋田、能代、津軽を経て渡嶋(北海道)に達し、渡嶋蝦夷を服属させている。

反乱と平定

仏教は中国から百済を経て伝来(五三八年または五五二年)したが、新しい宗教としてだけでなく最新の文化として受け入れられた。

中央政府は度重なる遷都により財政逼迫していたから、北方経営に頼る必要があった。蝦夷の同化政策は締め付けばかりでなく仏教布教により進められ、東北部を中心に発達してきた文化は七世紀以降には倭人文化の影響を受け変容していく。

元来、北進政策は蝦夷を服属させ搾取するのが目的だったから、蝦夷はしばしば反乱を起こして抵抗した。朝廷は何万

旅の風景スケッチ日和

〈第2回〉 文士の面影

おおもり しゅんじ
大森 俊次
(京都保事協/事務局長)



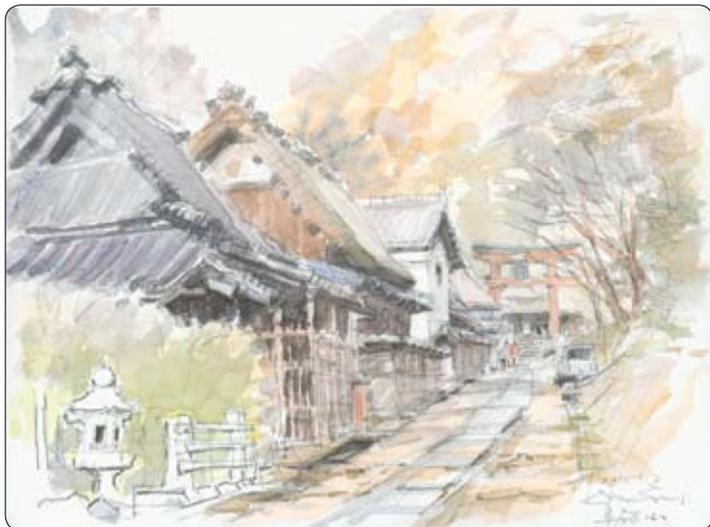
御坂峠

永遠に文学青年のイメージに包まれた太宰治。昨年、生誕百年で話題になったが、いま読み直してみても面白い小説がいっぱいある。デカダンに生き、デカダンに死んだ太宰にとって、家庭人として一番安定していたのが甲府時代だったらしい。その頃の代表作『富獄百景』の有名な一節「富士には月見草がよく似合う」の文学碑が立つ御坂峠の天下茶屋まで来たが、月見草も月見うどんもない。しかたなく食べた名物イモダンゴが実に美味しかった。

奥明日香

社会派推理小説に金字塔をうち立てた松本清張は太宰と同年生まれだ。「点と線」、「眼の壁」、「蒼い描点」など中学生の僕でも面白かったが、学生時代に読んだ『火の路』も忘れ難い。古代史ミステリーと推理サスペンスを見事に融合させたこの本を片手に明日香を歩いた日々がなつかしい。しかし、もしも清張が古代史に首をつっこまなかったなら、昭和史発掘にもっと成果を上げたかも知れないと惜しむ声もあるそうだ。なるほどなあ、納得！



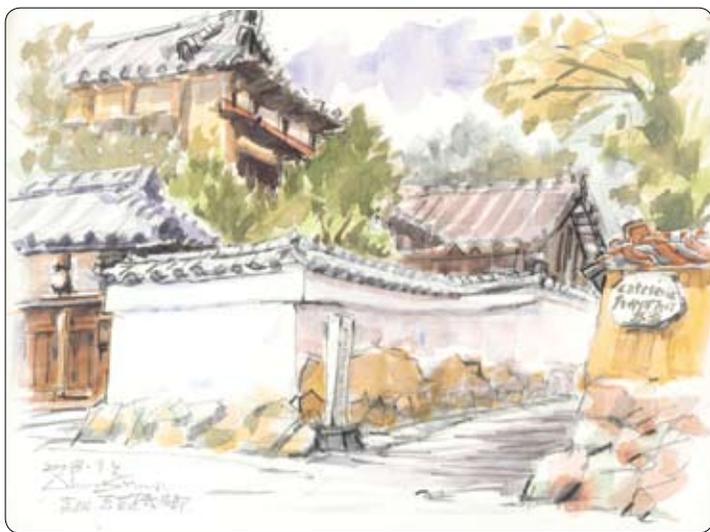


嵯峨鳥居本

観光客の多い嵯峨野だが、あだし野から鳥居本まで来ると人や人出が少なくないので、時々スケッチに歩く。小説『あだし野』だけでなく、立原正秋が京都について書いたエッセイも好きだ。「最後の無頼派文士」と言われた立原は、日本中世文学にも造詣深く、ニヒリステイックでありながら華麗な文体で大人の恋模様を描いた。柄にもなく僕も一時かぶれていた立原正秋が亡くなってちょうど30年になる。ああ。昭和は遠くなりにけりやなあ。

小樽

小樽を訪ねた時、へそ曲がりの僕は観光客の多い運河に背を向け、山手に立つ旧日本銀行を描いた。近年、『蟹工船』が読み直され、話題を集めたプロレタリア作家・小林多喜二は、小樽商科大学を経て銀行員としてこの地で短い青春時代を過ごした。反戦平和の非合法活動に身をおきながらも、ユーモアを忘れなかった優しい人柄の多喜二が特高警察に殺された際、その悲報を聞いた志賀直哉が「暗澹たる気持ち」と日記に書いた話が印象深い。



奈良高畑

奈良公園から飛火野を南へ抜けた高畑町に志賀直哉旧居がある。何度かスケッチの機会があったが、いつ来ても何やら文化的香りがして気持ちいい。「白樺派」として登場し私小説を文学に高めた志賀直哉にも心ひかれる。「小説の神様」と畏敬された志賀の文学的権威に対して、評論『如是我聞』でケンカを売るように嘯み付いたのが、ほかならぬ太宰治だからまたオモシロイ！「文学者ならば弱くなれ」、太宰のこの言葉にはハッとさせられるものがある。